

O1-033

特別支援学校等部の生徒あるいは卒業生の 自立志向に関する一考察～本人の意思を尊重した自立観とその支援とは～

高木 彩恵、コリー 紀代

北海道大学医学部 保健学科看護学専攻

【目的】

医療的ケア児の自立観は各方面で研究されてきたが、本人が自己決定をして主体的に生活することが自立であり(星加、2001)、周囲の支援者は本人のニーズや事情を把握し、個性を重視した支援を行うべきである(谷口、2011)と考えられてきた。しかし、実際には医療的ケア児自身を対象とした研究は少ない。本研究では、医療的ケア児の自立志向を調査し、導き出された自立観から本人の意思を尊重した自立支援を検討することを目的とした。

【方法】

2017年8月に特別支援学校にて、保護者の同伴で半構造的面接を行った。本人の体調を考慮して面接時間は30分とし、生徒あるいは卒業生が回答しやすいよう、本研究独自の質問項目を準備した。

【結果・考察】

面接内容から199のコード、8のカテゴリーを抽出した。医療的ケア児らは、将来一人暮らしをしたいとは考えておらず、できることを増やしていきたいと考えていた。「痰をとってほしい。」などの発信・介助依頼は、幼少期からの努力・試行錯誤や、多くの人との関わり、タブレットなどを含めた多様なコミュニケーションツールが促進因子であり、他人への介助依頼に対する遠慮や母子分離への不安が阻害因子となっていた。安富(2011)は、周囲の人に助けを求める、即ち依存することが自立であると述べている。医療的ケア児にとっての自立は、本人が家庭と学校に支えられながらより多くの人に依存して生きていくことであり、できることとできないことを見定め、必要とする支援を自己決定・判断し、それを周囲の支援者に発信・依頼しながら生活することであると考えられる。この自立観における自立支援の方向性は、本人の医療的ケアへの理解を深める支援、本人の意欲を支持する支援、そして、全て自分でこなそうとするのではなく、頼ることのできる相手を増やす支援の3つが考えられた。

【結論】

医療的ケア児らが考える近い将来の自立像は、自分でできることを増やすことであった。本研究の実施により、本人の意思や本人が考える可能性について周囲の支援者が関心を持つことの重要性を改めて痛感した。そして、自立支援においては、本人へ自身の健康保持に必要な知識を提供し、何ができそうか共考・提案し、本人の夢や目標を支持する方法の探索や開発が重要である。多様なニーズに応える受け皿となる、さらに豊かな人的・社会的資源の確保が必要になるのではないかと考える。